

世界中の日常を一変させたコロナ禍

～伝わり、残る、疫病退散への願い～

木村 隆行（前 新潟市北区郷土博物館 館長）

令和2（2020）年初頭から日本国内でも感染が広がり始めた新型コロナウイルス感染症。ほぼ1年が経った令和3年春から、ようやく待望のワクチン接種が始まりました。

世界中で猛威を振るうこのウイルスの影響で、日常生活は一変し、日本中の学校・公共施設では、感染防止対策として臨時休校・休館の措置が取られました。また、博物館・美術館等も臨時休館となり、人々の“すごもり”傾向等により多くの館で来館者数は低迷したようです。

当館は、令和2年4月21日から5月10日までの20日間休館しました。休館明けからは入館時のマスク着用・手指の消毒をお願いしています。また、例年実施している事業にも大きな影響がありました。小中学校の臨時休校を受けて「松蔭賞書道展」は会期を調整し、「北区こども科学展」は中止、そして、30回目となるはずの「博物館まつり」も中止し、年間入館者数は大きく減少しました。

さて、日本でも世界でも疫病が蔓延すると、神々など人間ではない存在にすがれる傾向があります。このたびは、江戸時代のアマビエという妖怪が日本中で脚光を浴びました。県内では、「福島潟に光り物の妖怪が現れ、その姿を朝夕に見ると難を逃れられる」という江戸時代の刷物（右図）があることがメディアで取り上げられました。福島潟が北区にあるため、当館もこの妖怪に関する問い合わせやメディアの取材に対応しましたが、潟周辺にも県内にもこ

の話は伝わっておらず、江戸時代の福島潟に思いを馳せた1年となりました。

北区では、福島潟の光り物の史料は未発見ですが、集落に伝承する神楽舞・獅子舞に「疫病退散」を由来とするものが4つあり、企画展では、そのうち2つの神楽のお頭を展示しました（内容は3頁）。企画展を通して、郷土芸能が人々の暮らしと深く関わっていることを広く紹介する機会を得るとともに、当館でも再認識する機会となりました。

令和2年度は北区の歴史と疫病との関連を意識した1年でした。今後、1日も早くこのウイルスが完全に終息し、以前の日常に戻ることを祈ってやみません。



新潟県立歴史博物館蔵「光り物 刷物」

— 閉塞感のただよう今こそ — 博物館でゆったりとしたひと時を

川崎 裕子（新潟市北区郷土博物館 館長）

新年度から北区郷土博物館長に就任いたしました川崎と申します。よろしくお願いいたします。

いまだ収束が見えないコロナ禍の中、新年度を迎えました。新型コロナウイルス感染症拡大により、私たちの生活は一変しました。日常生活の中で人と人との関係や関わり方など変化を余儀なくされる中、昨年度、博物館でも止む無く中止や会期を変更した事業があります。

多くの皆様からご参加いただいている「松蔭賞書道展」や「北区こども科学展」、「博物館まつり」などです。今年度は可能な対策を十分に取ながら事業を実施したいと考えております。また、常設展拡大企画「昭和のくらし展」

や美術企画展「本の読みかた、愛しかた」展、また秋には「眼と手のあいだ—4人の画家がみつめた風景」など計画しています。

さらに令和4年度開催予定の「木崎村小作争議100周年事業」では、展示予定の市指定文化財の修復や資料調査を継続しながら、準備を進めています。

先の見えない閉塞感のあるこんな時こそ、博物館にお出かけいただき、ゆっくりじっくりと多くの歴史的資料に触れながら、古に想いを馳せていただくひと時を過ごしてもらえたらと考えています。多くの方のおいでをお待ちしています。